



誇り高き人々

yoshimeki haruhiko

吉目木晴彦

講談社

吉目木晴彦

yoshimiki haruhiko

誇り高き人々

誇り高き人々 ほこりたかひとびと

1991年3月20日 第1刷発行

著者 吉目木晴彦

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号 一〇二
電話東京(〇三)三九五―二二二(大代表)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一四〇〇円(本体一三五九円)



落丁本・虫丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本
についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部あてに
お願いいたします。

© Haruhiko Yoshimizu 1991, Printed in Japan

誇り高き人々

装
幀

菊
地
信
義

窓の木

島根県の北辺から、日本海へさらに三キロばかり突き出した江城鼻^{えじろばな}の西、周美^{すみ}という町の鉄道駅近くに、幾分南向きに傾^{かた}いだ山桜の巨木があった。

小さなビルが集まる町の中心部にぽっかり穴を空^あけた、五百坪ほどのさら地のちょうど真ん中に、一本だけ、忘れられた古い塔のように聳^{そび}え立っている枝ぶりのよい樹木は、海岸線と並行して南北に連なる低い山並み——敲山^{きやま}や根幡岳^{ねはただけ}の斜面からでさえ、すぐに探し当てることができる。

周美には、他に桜の木がなかった。

パチンコ屋の隣にある金田勲いさおの店の、木枠で縁取りされた四十センチ四方の小窓の真正面に、この山桜が見えた。二十年前、パチンコの景品買いの店を手に入れた当時は、線路越しに百メートル先の山桜の木まで視界を遮るものは何もなかった。七、八年前から銀行の支店や電機店の入った雑居ビルが建ち始め、踏切の西側を国道沿いにびっしり埋め尽くしてしまったが、金田の店の窓からは建物と建物の間を透かして山桜が見えるのである。自転車がやっと二台置ける程度の隙間。何層にも重なったビルの陰で、誰かが企たくんだ悪戯いたづらのように、縦に細長く仕切られた空間が、建設会社の資材置場になっている空地まで通じている。景品を売りに来る客の脇の下に、風に吹曝ふきさらされた樹木が蹲うすくまる。

「くどくど同じ話ばかり繰り返したって、埒らちあかんさ。今日で決まらんのなら、こっちで願下げにしてみようが」

パチンコ屋の店主の声が怒気を帯び始めてようやく金田は決心した。追い詰められた気分だった。そんなに手堅い商売ならば、他人にやらせないで自分で営業すればいいじゃないか。都合のよい話に乗せられて、大事な金を巻き上げられるのではないかと考え、ひどく怯おそえていた。

「嘘だと思ふなら六法全書を買って来て、自分で確かめてみりゃいいにさ。わしがやるわけには行かんのじゃ。法律で禁じられてるのさ。だから今までだって常田ときたさんをお願いして来たん

だが」

「この人はいつだってそうなんだわ。何も決められやせんのだから」

「だってよ、おまえ」淑子にあらさまに詰られ、金田は妻の顔色を窺いながら反論する。
「あまり急な話だったからさ。買うよ。おまえがそうして欲しいって言うんならさ」

彼女に対する、せいっぱいの抗議だった。常田という五十がらみの男が、パチンコの景品
買いの店を百万円で譲ってもいいと申し出たのは、淑子と別れて博多で開いていた床屋を廃業
しなければならなくなった金田への、慰謝料代わりという含みがあつての話だった。夫婦別れ
をしたい、と言いつ出したのは、淑子の方だった。常田とは二年も前から付き合つていたと言
う。百万なら格安だよ、あんた。パチンコ屋の親父とうまくやっていきな。食いつぱぐれる心
配はない。理容師の免許持つてるのは淑子だけなんだろう？ あいつだって元の亭主にみじめ
な生活はしてもらいたくないって言つてるし。

「勘さん、あんた何をたわけたこと言うてるのか。嫁さん取られた上に、相手の男に金を払う
者がどこにおる？ そんな女房はくれてやりゃいいよ。その代わり相手の全財産ふんどくつて
やらんな。神戸にサウナ風呂二つも持つとると言いよるんじやろう。ど田舎で他人に貸しとる
ちっぽけな店を百万円で売つて、向こうはまる儲けじゃないか」

八つ歳上の姉は、弟に打ち明けられた時、憤激して叫んだ。

「そんな要求できんよ。裁判になる。裁判する金なんかねえしよ。食って行かねばならんも
ん」

「あんたが相手の言いなりに金を払ったりしたら、それきり姉弟の縁を切る。あの女は勲さんのこと、腹の底からバカにしとるんよ」

本当にやくざが来たりはせんのだろ、金田はその点だけ何度も念押しした。

「この町にはやくざ者はおらん。何もない町だから、やくざも生計が立たんのさ。パチンコ屋もうちともう一軒だけで、他に景品買いてくれるところもないし、こっちだって無茶な値段で買い叩いたりせんが」

「客はパチンコで取った景品をあんたの所へ持ち込む。あんたは買い取った景品をパチンコ屋へ売る。パチンコ屋はそいつをまた景品として出す。みんな持ちつ持たれつだよ」

金田とパチンコ屋の店主とのやりとりを黙って聞いていた常田が、最後に口を挟んだ。

二十年経って、金田勲はもう六十歳を越えているように見える。小さな窓の内側には買い取った景品を仕分けして棚に並べた六畳間と、四畳半がもう一間、台所と風呂。店がそのまま彼の住居でもあった。ちょうど満州事変が始まった頃、両親と姉と一緒に、直江津へ向けて日本海を渡った時の様子をよく思い出す。まだ五歳になるかならないか、波の穏やかな夏の夜、姉にせがんで船底の暗い大部屋から甲板へ連れ出してもらった。満月の下を煤のような黒い雲が

船よりも早い速度で逆方向へ流れて行く。午後十時に店を閉め、風呂から上がって仰向けに天井を見つめていると、あの日の光景が頭の中に広がって来る。

付き合いはごく少なかった。勲という名前を知っているのは、パチンコ屋の店主と従業員くらいかもしれない。周美へ移り住んだ時、近所の商店を一軒ずつ回り、手拭いを配った。挨拶をする必要は認めていたわけで、今思い出す者がいたら驚くに違いない。

「カネやんはいいい所に店を持ったね」

パチンコ屋ではレジの女の子までが、彼を昔の野球選手になぞらえてカネやんと呼んだ。

「もう今からこの近くに店を買ったんじゃ、合わないもんね」

かつかつ食えるだけだよ、そう金田は答える。売り飛ばすわけにも行かぬえしさ。

昼間はずっと穴蔵のような店の中にこもりきりで、食事は昼夜ともたいてい店屋もので済ませてしまう。起きぬけは胃が働かず食べものを受け付けないから、朝食は取らないのだと言っているのを聞いた者がいる。同じ通りに軒を並べる雑貨屋や眼鏡屋でさえ、金田が表を歩いている姿を見かけることは稀だった。案外、小金を貯め込んでるに違いないよ、噂話がパチンコ屋の店主の口から本人に伝わった。わしの稼ぎがいくらくらいのもんか、あんたは知ってるだろうに。

「外に出なきゃ、結構残せると思うが」

そう言われて、普段は無表情な金田が、愉快そうに喉の奥で笑った。

住居兼用の店の中に他人が上がり込んだのは、本人の記憶を総ざらいしてみても、二十年の間に二回だけだった。

一度目は一九八一年二月、昼時分、中華そばの出前を取って食べ終った直後、狭心症の発作を起こし、倒れた時である。客の応対をしている最中、不意に絞め付けるような激痛があばら全体を襲った。黒い影が続けざまに目の中を走り抜ける。軀を支えようとして右手を畳に突いたところ、パチンコ屋から譲り受けて使っていた古いレジスターを、引っくり返してしまった。

「頼むから、救急車を呼んでくれ」

小柄ではあったけれど筋肉質で、二十歳はたちの頃から体重が変わらず、虫歯になりやすいのを除いては、健康について気に留めたこともない。もちろん心臓に異常を感じたのは初めてだった。金田は動転した。周美の町に移って以来、ただの一度も他人に頼みごとをしたことのない彼が、助けてくれと言った。

客は驚いた。前にも二、三度、景品を売りに来た、四十過ぎのセールスマン風の男だった。窓枠に顔を押し付けて、おい、どうしたんか、と繰り返す。

「頼むよ。お願いだ」

それで客は躊躇^{ためら}いがちに、近くにゐる人へ声をかけ始めた。誰も近寄つて来ないと知つてから、やっと大声で助けを呼んだ。軀をまるめて息を殺したまま、金田はまずいことになったと唇を噛んだ。部屋の中は汚れ放題だった。脱ぎ捨てたきり、半年近く押入れに放り込んだままの衣類さえある。台所の流しの濁った水の中には、何週間か前に使った食器が沈んでいる。

三軒先の八百屋の夫婦が、隣のアパートに間借りしている中学校の教師と一緒に金田の部屋に入つて来た。中学校の教師は地理を教えている三十代半ば^{なか}の独身者^{ひとりもの}で、笹倉といった。笹倉は金田勲の様子を見るなり、すぐ受話器を取つて救急センターを呼び出した。煙草の脂^{あぶら}が付着し、掌へ貼りついて来る受話器の感触に笹倉が一瞬怯^{ひる}んだのを、金田は見逃さない。が、一番応えたのは八百屋の主人が口にした、

「こんなところに住んでおったんじゃ、誰だつて軀を壊しちゃうが」

という言葉葉だった。この店をよすがにしてやつとこの世にしがみついているのに、それが病氣の原因だと、にわかに断定され、彼は唯一のものを奪われるような恐怖にかられた。言うまでもなく、随分過剰な反応である。肉体に変調を来たしているのではなかったら、こんな風に感じはしなかったかもしれない。だとしても、金田はこの時の氣持を長い間、忘れられなかった。氣にかけながら放つておいたツケが思いもかけない時に回つて来た。苦しい息の下で、彼は激しく後悔した。

担架に乗せられて救急車まで運ばれて行く途中に、首を擡^たげて路地の角にある店の、開け放たれた戸口を見やると、サイレンを聞いて飛び出して来たパチンコ屋の店主が部屋の中を覗き込んでゐる。買い取った景品の中には食料品もあるのに、あんなに汚れたところへ置いているのを見られては、もう商売を断られるかもしれない、今度はまた別の不安が彼の心にのしかかって来た。

発作は一回限りで治まった。今も冠動脈拡張剤を飲み続けているが、医者にはだいたい以前から必要ないと言われている。神経質に部屋の掃除をするようになったのも、狭心症をきつかけに変わった点だった。

次に、金田勲の部屋の中の様子が他人の目に触れたのは、一九八九年十一月、店に強盗が入った夜だった。賊は三十七歳になるトラック運転手で、迂闊な男であった。ゴミ収集場所の脇にあるドアの鍵を破って、忍び込もうとするところを、通りの真向かいにある床屋の二階から見られていた。アイロンかけをしていた妻が気付き、夫に知らせる。夫はただちに警察へ通報した。

派出所の警察官が拳銃を構えて現場に踏み込んだ時、金田は強盗犯に足を縛られている最中であつた。

「わしが怪我をせんようにやってくれ」

助けに現われた若い警察官の姿を認めるなり、彼は叫んだ。

周美では、戦時中に陸軍から脱走して逃げ込んで来た兵隊が押し込みを働いたことがあるだけで、強盗事件などは絶えてなかった。経験の浅い地元出身の巡査は咄嗟に「神妙にせい」と言った。時代劇にでも出て来そうな一声が、翌々日の地元の朝刊で社会面の見出しになった。初めて遭遇する重大事件にすっかり緊張して、目の吊り上がった青年の形相に、犯人の方が肝を潰す。バネ仕掛けの人形のように立ち上がり、両手を挙げた。

署の応援が到着するまでの間、金田勲は縛られたままの状態で放置された。巡査は手錠をかけた強盗犯を見張っているのにせいっぱいだったのである。本署の刑事が鑑識班を引き連れてやって来る前に、出雲民報社の記者がカメラ持参で乗り込んで来た。容疑者には近寄るんじゃないぞ、と警察官に注意され、年配の記者は上り框かまちに腰を下ろして取材を始めた。犯人の姓名と年齢を問い、答えが得られないと今度は写真は何枚も撮影した。取り押さえられてからしばらく経って、強盗犯も幾分人心地がついたものらしい。

「勝手に写真など撮るんじゃない。誰の許しを得てやっとなるんじゃない」

と言い、記者と激しい口論を始めた。巡査はホルダーに収めた拳銃の握りに手をかけ、言い争いを止めるでもなく黙って同僚を待った。

刑事が到着し犯人をパトカーに乗せてようやく、金田勲の縄が解かれる。

「これは簡単には落ちないので、熱い湯に浸した雑巾でよく拭いて下さい」

作業服を着た鑑識係が指紋採取のために銀色の粉を方々にまぶし、刑事が戸棚や押入れの中を改める。三和土^{たつき}の隅の靴箱の中から、何冊もの好色本が出て来た。SM雑誌が主で、男色雑誌が一冊混じっていた。刑事は二、三度頁を繰った後、元の場所にしまった。その様子を新聞記者が写真に撮った。

翌朝、金田は雑誌を嚴重に梱包し、全部捨ててしまった。狭心症の発作で倒れて以来、かつて掃きだめのものであった彼の住居は、ずっと清潔に保たれている。好色本も処分してしまつて、これでもう誰にいつ家の中を調べられても恥ずかしい思いをせずにする。そもそも二つの事件が起こった時を除けば、町の住人が彼の私生活に接することなどなかったし、急に社交性にめざめ、部屋へ人を招く気になったわけでもない。それでも金田は気分が軽くなった。生活が建て直されたという気がし、途端に今までの習慣の一切がまっとうなものではなかったように思えて来た。よく平気でいられたものだ、何で自分はあんな暮らしぶりをしていたのだろうと訝^{いよ}った。

金田勲の住居兼用の店の中に他人が上がり込んだのは、二十年の間にこの二回だけだった。二回とも、金田は人に助けられたのである。だが、本人はそうに考えてみたことはない。別に片意地だったわけではなく、ものごとの見方にある種の偏りがあったのだろう。

強盗が入ったのを機に、金田の態度にも変化が現われた。窓の外の光景に目が向くようになった。周美へ移って以来、この町の何を見て来たのか考えてみると、わからなくなる。部屋の中のことにばかり目を奪われていた気がする。彼はそれまでまったく興味のなかった資材置場の山桜の木に関心を持ち始めた。金田勲は一つの発見をした。車椅子に乗った青年が、よく山桜を見に来る。自分の他にも、少くとももうひとり、この古い樹木に興味を寄せている者がいるわけだ。パチンコ屋が休みになる木曜日には、金田も店を閉めて空地へ出かけて行った。時々、車椅子の青年と鉢合せした。すると妙に緊張してしまう。何か話しかけるべきなのではないかと思い、何を話せばよいのか見当がつかない。こんな経験は過去にはない。青年がなぜ山桜の木に関心があるのか知リたかった。向こうもそう思っているに違いないと考え、しかもそれはあまりに無類な態度だという気がした。

空地までちよくちよく足を運んだのは、花が咲いたら写真に撮ろうという計画を立てていたからである。金田は急にカメラに凝り始めた。撮るにせよ撮られるにせよ、およそ写真などには縁がなく、全自動カメラの操作もできなかった男が、マニュアル・フォーカス方式の一眼レフカメラを買い込んだ。一九八九年の年の瀬に思い立ち、鉄道に乗って松江まで出かけ、カメラ屋が一番値引してくれる品物を買った。二八ミリから二〇〇ミリまでカバーできるズームレンズの付いた、珍しい機械だったが、手に入れた後に写真撮影の手引書を随分読んで、案外掘

り出しものであったことを知った。

山桜の木が花を咲かせるまでには、まだ二月以上間がある。正月休みの間、金田は店の小窓を少しだけ開いてレンズの先端を突き出し、ファインダーを覗いて過ごした。しかし、じきにもの足りなくなってしまった。商店街が営業を始めるのを待ちかね、月応寺の門前にある花屋で福寿草の小鉢を一つ求めた。電信柱の横の陽だまりに鉢を置き、三脚を立て、写真雑誌と首引きでマクロ撮影を試みる。近接距離でズームを使い、四つの花のうちの一つに焦点を合わせて、他はわざとぼかす初歩的な技術を使った。雑誌に書いてある通り忠実に行ってみると、それらしい画が撮れる。彼はいたく感心した。

金田勲は朝十時にパチンコ屋が開くまで、カメラをさげて町内を歩き回り、雑草に花がついているのを見つけては撮りまくった。部屋の中にはたちまちのうちに写真技術の本が増え、自分が撮った花の名前がわからないのに思い当たって、二十巻もある植物図鑑を本屋に注文した。小窓の前に坐っている時でさえ、商売の合間に本を開いて撮影方法を研究する。

ある朝、通りの向う側に並ぶ建物の細い隙間を通して、山桜の木が花を咲かせたのを見つけた時には、顔も洗わぬまま外へ飛び出した。線路下の地下道を走り抜け、資材置場に着くなり三脚を広げた。十二枚撮りのフィルムをたっぷり七本も使い切った。ISO六四、一〇〇、二〇〇。コニカ、コダック、それに東京の商社へ郵便為替を送って取り寄せたアグファ・ゲバル